

ドイツ 軟着陸を模索



27日、パリの仏大統領府で、オニ
ンド大統領（左）との会談を終え
たEUのトゥスク大統領（AP）

かなぜSEZUといふ小国集団のいうことを聞かねばならないのかと反発した結果であるた。

青山学院大学教授(国際政治)

羽場久美子氏

私はこうみる

英、EU離脱

英國の国民投票は、さまざま
な意味で番狂わせであつ
た。理性で考えれば、28カ国
が加盟し、5億人を抱える歐
州連合（EU）に英國がとど
まるメリットは極めて大きか
った。だが、英國民は離脱に
流れこ。大臣も皆國のアラブイ

英國は、中国主導のアジアインフラ投資銀行（AIIB）に最も積極的にかかってきた。英國はまた、世界の金融センター、インフラ整備のノウハウを生かしてアジアに足がかりを模索する可能性が高い。

近を強化するであろう。中国は、米国とのアジア・リバランス戦略や中国封じ込めに対応する形で、EUとの連携を戦略的に深めようとしている。EUの不安定化や内部の分離主義が拡大してEUが分裂することを望んではいない。それは中国国内の少数民族族の分離主義にも飛び火するからである。

日本は、難いかじ取りを迫られる。グローバル化による自由競争ではなく、國の主権を第一とするブリテン・ファーストは開かれた経済関係にも障害をもたらす。米国が伝統の孤立主義に回帰し、経済的にも軍事的にも他者を排除する姿勢になると、地域経済関係の発展にも影響を及ぼす。

中印に頼らざるを得ない

米軍の縮小や撤退は、日本の安全保障をどうするかといふ根本的な問題を突きつける。日本の政治外交戦略は今後の米英関係、英EU関係をにらみながら、再検討を迫られる。英国は、自ら衰退に向けて、パンドラの箱を開けてしまったとみて見える。

英 EU離脱

「アリコッセル」宮田出男、英國の歐州連合(EU)離脱問題で、ドイツのメルケル首相が「軟着陸」を模索している。EUの一部では、英國に迅速な離脱通告を求めるなど、対英圧力を高まっているが、メルケル氏は拙速を警戒する。離脱問題への対応を議論するEU首脳会議を28日に控え、残る27加盟国の結束を

図りつて、欧洲の安全構築や経済に重要な英國との良好な関係を維持しようと磨心しているとみられる。

強調。英國に厳しい態度を示す一部の加盟国とは公認的な姿勢を示した。

独仏伊などEUの母体創設6カ国外相は、25日(木)会合で英國に早期の手続を求め、エロー仏外相は「ヤメロン英首相に喫緊のさせ代も要求。ユンケル欧州委

父兄のいとも迫る。圧力の背景にあるのは、不安定な状況を早く解消し、EU懐疑派の台頭で離脱の動きが他国に飛び火するのを回避したいとの危機感だ。だが、こうした動きは他の加盟国の疑惑も生んでい

意見を強い。メルケル氏は「対応を「27カ国で決める」とし、加盟国間に亀裂が入るのは避けたい考えだ。メルケル氏は、英国が「経済的に結びつき、安全保障も共にするパートナーだ」とも強調する。新興国の台頭やイスラム教スンニ派過

国は、英國の財政負担につながりかねないとの警戒感もある。メルケル氏の周辺からも、「英國に再考の時間を与えるべきだ」との声も上がり始めた。離脱問題の着地点をどう描いているかは不明だが、英國の離脱通告先送りが、解決策を探す時間ができない（出所：共同）。

首相「短期的な争いしない」

る。エストニアは27カ国との団結が優先（イルベス大統領）とし、6カ国が先走るのを警戒。東欧には英からユーロ圏の統合を加速させようとする動きも見えて、日

英国の選択 世界に波紋

細谷 雄一
東京外大大学院教授
専門はフランスの政治外交論。東京外大国際関係研究所長。2008年から2年間、在仏日本大使館公使。著書に「現代フランステー『栄光の時代』の終焉、歐州への活路」(岩波現代全書)など。



渡辺 啓貴
東京外大大学院教授
専門はフランスの政治外交論。東京外大国際関係研究所長。2008年から2年間、在仏日本大使館公使。著書に「現代フランステー『栄光の時代』の終焉、歐州への活路」(岩波現代全書)など。



羽場 久美子
青山学院大教授
専門は国際政治経済学。ロンドン大、米ハーバード大の客員研究员として欧州の地域統合などを研究。北米の世界国際関係学会副会長。著書に「ヨーロッパの分断と統合」(中央公論新社)など。



英國が国民投票で歐州連合(EU)からの離脱を選択した。第二次世界大戦後、統合の道を歩み続けてきた歐州は分裂してしまうのか。歐州問題の専門家である▽羽場久美子・青山学院大教授、渡辺啓貴・東京外大大学院教授▽細谷雄一・慶應大教授――の3氏に、離脱決定の背景や今後の歐州の動き、日本への影響などを語ってもらった。

【司会・小倉孝保外信部長、写真・北山夏帆】

EU離脱 識者座談会

感情派が勝った 渡辺氏

国民投票の結果

――国民投票の結果はどう感じましたか。

渡辺氏 残留派が勝つと思っていた。〈残留した方が経済などの面で得策だという〉理性派と、〈離脱して英國の主権を回復するという〉感情派との戦いで、感情派が勝ったという見方ができる。

私は從来、EU統合は「国境を超えたリストラ」と表現してきた。一国だけでは社会や経済の苦境から脱出できないので、国同士で互いに協力しながら行動していく。当然、その中で、組織の再編成、制度や法の改正も必要になってくる。従つて経済の調子がいいときには問題はないが、不調のときにはその責任が「統合」に押しつけられる。苦しい状況にある人たちが、EUをスケープゴートにしてしまった形だ。また、EU制度そのものへの忠誠心が定着していないことも示された。

羽場氏 重要なのは3点だ。

――國民投票の結果をどう感じましたか。

渡辺氏 残留派が勝つと思っていました。(残留した方が経済などの面で得策だという)理性派と、(離脱して英國の主権を回復するという)感情派との戦いで、感情派が勝ったという見方ができる。

――二つ目はネーミングの問題だ。離脱派の「BREXIT」(英國→BRITAIN)と離脱へEXITの造語は魅力的に聴いたが、「残りや『現状維持』は、有権者には地味に映った。英國の方に問題があるにもかかわらず、いかにもEUに問題があって、離脱によって、過去の大英帝国の夢が再現できると大衆が錯覚してしまった。實際には幻想であるのに。「ブリテン・フェースト(英國が第一)」という言葉も反対につつたと思う。

三つ目は、中産階級が起こした反乱だ。経済的に疲弊し、不満を持った政治・外交でもより一層ドイツの影響力が強まる。経済も、現在EUではドイツだけで全体の5分の1がEU内に集中している。つまり、EUの共感を漫透させるのに役立つたと思う。

――三つ目は、中産階級が起こした反乱だ。経済的に疲弊し、不満を持つれば、政治・外交でもより一層ドイツの影響力が強まる。経済も、現在EUではドイツだけで全体の5分の1がEU内に集中している。つまり、EUの共感を漫透させるのに役立つたと思う。

三つ目は、中産階級が起こした反乱だ。経済的に疲弊し、不満を持つれば、政治・外交でもより一層ドイツの影響力が強まる。経済も、現在EUではドイツだけで全体の5分の1がEU内に集中している。つまり、EUの共感を漫透させるのに役立つたと思う。

中国接近に懸

周辺国との関係

――この結果は英國や歐州にどんな影響を与えるのでしょうか。

渡辺氏 ポピュリズムや反EUの勢いが歐州で盛り上がるだろう。たゞ、既に英國通貨ボンドや株価は暴落しており、経済的に非常に厳しい状況になる。キャメロン氏が辞任せきり10月以降、「英國の離脱決定はうまくいくっていない」となると、歐洲の極右勢力がポピュリズムの勢いに乗って支持を拡大するのは難しくなる。

一方、英國が孤立化の道を歩んだとして、それが独仏にとって良いわけではない。短期的には、独仏がここで英國を見切る態度を取ることはない。今後、英國と独仏などの交渉がどう進むかが大きな焦点だ。

羽場氏 EUのレーヴンデールトル

(存在意義)は、米国に並ぶ、また

は米国を上回る経済圏を形成して、

「規範の帝国」という世界の頂点の地位から離れないことだ。加盟国をEUの枠内にめぐらすとする動きは強化されるだろう。

その場合、最も大事なのは、中間層に対するポピュリズム勢力の影響力を弱め、政権側が中間層をいかに取り込めるかだ。そのためには失業者の雇用創出や社会安全保障を手厚くするなどの対策が必要だ。しかし、EUも英國もその予算が足りない。

「強い英國」「強い歐州」という言葉

大衆迎

歐州の今後

――地域によっても結果が分かれましたね。

細谷氏 離脱派は民意に沿わない政治はおかしいから国民投票をせよと言った。だが、スコットランドは住民投票をすれば今は100%離脱する。北アイルランドとアイルランドの間はEUとの関係で移動が容易だ。しかし、離脱で国境管理が強化されると、北アイルランド紛争が再燃する可能性もある。連合王国の崩壊が始まろうとしている。

英國が世界に影響力を持つのは、連合王国が一体となることが前提になっている。だが、英米関係で言えば、重要な海軍基地の多くがスコット

(大衆迎合主義)的书法が非常にうまい取り込んだ。米国のトランプ現象と同じだ。同じような中産階級を抱えているEU諸国に与える影響も大きいと考えている。

細谷氏 懸念通りだなという思いと、想定外だという感情の二つがある。まず、懸念通りだった理由は、

非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。一方、想定外だったというのは、

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは歐州諸国と比較し程度いる。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。



庶民の不満噴出 羽場氏 連帯意識の弱さ 渡辺氏

離脱の背景

—こうした結果が出た背景には何がありますか。

羽場氏 社会階層が二極化する中で、今回はEUへの残留がエリートやエースタブリッシュメント(支配階級)、企業の利益であるということ

念 細谷氏

の1を占めるが、英國が抜けるところが4分の1になる。あらゆる面で、ドイツの力が強まるることを中小国は恐れおり、これはEUにとってマイナス要因だ。

—英國の生き残り策は?

羽場氏 英國は経済面で、EU以外にも活路を見いだすことはできず、中国や旧植民地のインドといっただ(EU人口の)5億人を上回る市場が他にあるからだ。中國が主導する

アジアインフラ投資銀行(AIIB)へ金融ノウハウを提供したり、中国が推進する陸と海のシルクロード経済圏「一带一路」構想にインフラ技術を提供したりして関係を強め、英國がうまく苦境を乗り越えられる可能性はある。英國に進出している企業が、ドイツなどEU域内に拠点を移す速度によって、英國の衰退が早まるかどうかが決まる。

細谷氏 「英國はEUから離脱しても、中國、米国と連携するから発展できる」と離脱派は主張するが、根拠が怪しい。英國の貿易相手の45%はEUで、中國との貿易額は全体の6%に過ぎない。失う45%は埋めら

の関心事だ。

統合は一步後退、二歩前進なので、もう少し緩い形でしばらく維持するしかない。ギリシャ危機やユーロ危機のときに銀行統合ができたよう

に、危機のときこそ新しい制度設計を打ち出していく。今はそういう試練の時だと思う。

羽場氏 ポイントは3点ある。ま

ず、ボビュリスト政党がEU内で勢

いつづく。仏国民戦線やイタリアの「五

つ星運動」などが既に国民投票する

よう呼びかけてる。2点目は、英

国とEUはともに競争力を失ってい

く。3点目は中産階級への配慮しよう

とする動きが出てくるだろうが、実

現は難しい。

渡辺氏 EUが崩壊するとは思わ

ない。連合王国の分裂やボビュリズムの拡大がこれ以上伝染しないように

するというのが、歐州大陸の指導者の実施を決めた時、それがいかに恐

連合王国

ウェールズとアイルランドの北アイルランドの計4地域からなる。16世紀にイングランドがウェールズを併合。1707年にイングランドとスコットランドが連合した。1801年にアイルランドが併合されたが、1922年にアイルランドが自

由領となつた際、北アイルランドは英國として残つた。北アイラ

ンドでは長くアイルランドへの併合を求める武装闘争が続いた。

スコットランドでは2014年に独立の是非を問う住民投票が実

施され否決された。

英保守党

今のが与党で中道右派。富裕層や財界に支持者が多い。

政治体制が確立した19世紀からその一貫を担う。1920年代以降は、労働組合やブルジョア層が主に支持する労働党と政権を争う。党首のキャメロン首相はEU残留を強く訴えたが、ジョンソン前ロンドン市長やゴーブル司法相らは離脱を主張。党内分裂は深刻だ。

残留派のジョー・コックス下院議員

射殺事件以降、世論調査で残留派

が上回っていたのに逆転したこと

だ。事件後の選舉を見て、ほぼ残

るが、英國の國益を致命的に損なつてしまった。

コービン労働党党首の3人の行動

非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

残留派のジョー・コックス下院議員

射殺事件以降、世論調査で残留派

が上回っていたのに逆転したこと

だ。事件後の選舉を見て、ほぼ残るが、英國の國益を致命的に損なつてしまった。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

一方、想定外だったというのは、非常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。

党内の議員ではEU懐疑派が8~9割に上り、国民も離脱派が常に割合が高い。これは、EU懐疑派が常に高い比率だ。この状況から見ると、離脱派が勝つのも何ら不思議ではない。

英國の右傾化だ。1980年代のサッチャー首相以降、保守党が変質してしまった。特に90年代からは、欧洲の基礎で考えると、保守党は中道右派ではなく、極右政権化している。